

詠物と言志

——菅原道真を中心として

蔣 義 喬

はじめに

日本の上代から平安朝にかけての文人たちは、詠物詩を殊に愛好していた。平安前期には、天皇および天皇の周辺で詩の贈答を行う人々によって、多数の詠物詩が詠まれたが、手法の上で物に就いて物を写す、いわば「單純写物」が用いられたと捉えることができる。^①ところが、中期に入ると、こうした詠みぶりが、菅原道真の手によって、大きく変わっていったのである。本論では、そうした変化に注目し、道真の詠物詩のあり方を考察しつつ、道真文学の独自性に言及してゆきたい。

一、道真の詠物詩の特質

数え方にはよるが、^②『菅家文章』六卷（以下、『文章』・『菅家後集』一卷（以下、『後集』）における詠物詩は百五十首見られ、総詩数の三分の一近くを占めている。そして、巻首に載る少年時代の作「月夜見梅花」と、巻末に据えられた絶筆「謫居春雪」がともに詠物詩であることは、生涯にわたって続けられた道真の詩作において、詠物詩がいかに重要であったかを物語っている。

平安前期の作品と比べて、道真の詠物詩は素材、詩題、詩体などのあらゆる面において、豊富かつ高度な作品となっているが、その最大の特徴について言えば、詩の言志性にある

ように思う。このことは、次の二首の詠物詩を見れば窺いやすいであろう^③（以下、引用する道真、杜甫の詩に付した通し番号はすべて筆者による。）

五言、詠^二殿前梅花^一（『経国集』、卷十一、平城天皇（在東宮））

仲春雖^レ少^レ暖、梅樹向^レ驚^レ時。発^レ艷將^レ桃乱、伝^レ芳与^レ桂欺。可^レ攀猶可^レ折、堪^レ寄亦堪^レ遺。儻有^二鹽羹過^一、能無^レ致^二味滋^一。

① 早春侍^レ宴、同賦^二殿前梅花^一、応^レ制（『文章』、卷六・440）

非^レ紅非^レ紫綻^二春光^一、天素從來奉^二玉皇^一。羊角風猶頒^二曉氣^一、鵝毛雪剩假^二寒粧^一。不^レ容^二粉妓偷看取^一、応^レ叱^二黃鸝戲踏傷^一。請莫^二多憐^一梅一樹、色青松竹立^二花傍^一。同じく「殿前梅花」と題された二首である。平城天皇の詩は、東宮御殿の前庭に咲く「梅花」を詠むことに終始しており、特に内面的な吐露が見られないが、道真の一首は、帝徳賛美を本来の役割とする応製詩でありながら、「梅」ばかり偏愛する宇多天皇の風流志向を、貞節の象徴である「松」「竹」に道真自身を擬すことで諷諫したものとなっている。すなわち、前者は客観的に対象を描くことを重視するのに対して、

道真の詩は物を詠むことを通して、言志が表現されている。

「詩言志」をめぐることは、中国では民国期以来、日本では明治以来、一方に「志」を知性的、政治的、道德的な目的意識をもつものと捉え、従って「詩」を政治や教化のためのものとする解釈があり、他方に「志」を感情と捉え、従って「詩」を感情の発露とする解釈がある。対立するこの二つの解釈をめぐる、多岐に互る議論が交わされてきた^④。ここでは、こうした議論に踏み込まず、詩人の私的感興や寓意などをすべて「志」として扱うこととする。

以上のような立場に基づき、『文章』『後集』における詠物詩を考察した結果、言志が含まれる作品は八十二首数えられ、詠物詩総数の半分以上を占めている（附表参考）。創作時期ごとに数を示せば、文章博士時代（卷二）五首、讃州時代（卷三、四）三十三首、宰相・丞相時代（卷五、六）二十七首、太宰謫居時代（後集）十七首となっている。また、次のような特色が指摘できる。

- （一）道真の詠物詩に言志の内容が見えるようになったのは、元慶六（882）年の「匿詩事件」の時期からである。
- （二）言志が表されている詠物詩は卷一を除くすべての巻に見えるが、中でも讃州時代（言志33、詠物37）、太宰謫

居時代（言志17、詠物20）にもっとも集中している。

（三）三十歳前後の新進官僚時代（貞観十三～十八年、卷一）も、宰相・丞相時代も侍宴応制の詠物詩が主であったが、新進官僚時代には言志の表明が無いのに対して、宰相・丞相時代には数多く見られる。

（一）と（二）が示す分布形態は、いうまでもなく、左遷や流謫の境遇が詩人言志の直接的なきっかけをなしたことを意味しているであろう。ここで問題となるのは、道真における「托物言志」の手法を根底から支えるもの何だったのか。

また、（三）に見られるように、不遇な時期と対照をなす順風満帆の時期においても言志詩が作られたことについて、どう考えればよいのか、ということであろう。次に、中国詩との関連の中で、以上の問題を考えていきたい。

二、白詩と比較して

道真の詩に「蟬」を詠んだものが二首見られる。

② 聞_レ蟬（『文章』、卷二・180「夏日四絶」のうち）

寒蟬幸得_レ免_二泥行_一、危葉寄_レ身露_二養生_一。猶恨凄凉風未_レ到、不_レ能一旦自無_レ声。

③ 新蟬（『文章』、卷四・253）

新發_二一声_一最上枝、莫_レ言泥伏遂無_レ時。今年異例腸先断、不_二是蟬悲_一客意悲。

②「聞蟬」は卷二の卷末に収録された「夏日四絶」中の一首である。この詩は、道真が文人人間における門閥・学閥の争いに悩まされ、「匿詩事件」により大きな打撃を受けた時期の作である。一方、卷四の「新蟬」は、左遷の悲しみと望郷の念を託した、讃州時代の詠である。詩の解釈について、詳細は後述するが、ここで注意されるのは、この二首とも蟬の姿に詩人自身を投影しているという点である。

一方、道真が最も大きな影響を受けているはずの白居易も、数多くの詠物詩を作っている。ここでは江州司馬時代の「感傷詩」である「早蟬」と題された二首に注目したい（以下、掲出の引用文には適宜傍線を付す）。

早蟬（『白氏文集』、卷十・感傷）0510

六月初七日、江頭蟬始鳴。石楠深葉裏、薄暮兩三声。

「催_二衰髮色_一」、再動_二故園情_一。西風殊未_レ起、秋思先

レ秋生。憶昔在_二東掖_一、宮槐花下聽。今朝無_レ限思、雲樹遶_二湓城_一。

早蟬（『白氏文集』、卷十・感傷）0517

月出先照^レ山、風生先動^レ水。亦如^二早蟬声^一、先入^二閑人耳^一。「一聞愁意結、再聽郷心起。郷心渭上村、蟬声遠相似。衡門有^レ誰聽、日暮槐花里。

いずれも郷愁を詠じた作であるが、「一催衰鬢色、再動故園情」「一聞愁意結、再聽郷心起」とあるように、蟬の鳴き声を聞くことで望郷の思いが湧き起る、と詠む抒情詩であるゆえ、道真の詩が「蟬＝詩人」という図式を持つのは大きくかけ離れている。

こうした菅詩と白詩との径庭は「蟬」の例のみに止まらない。たとえば、道真の「残菊」は、白居易・元稹の詩の受容をきっかけとして独自に展開したが、「残菊」に道真が象徴的な意味で自己を表現しているのは、独特のものがある。「しほみそこなわれた菊」としての残菊が、道真自身の姿と重複して歌い上げられている。」と指摘されている^⑥。そして、詠竹詩の場合、竹を觀賞するという日常行為と詠竹詩を作るという文学創作との二つのレベルで白居易の影響を受けながらも、「表現面での白居易詩の影響は必ずしも大きなものではない」し、「雪夜思家竹」詩（後集、490）に見られる、詩人自身を雪折れの「竹」でなぞらえる発想は道真独自のものと指摘されている^⑦。また、道真は「残灯」「寒灯」「灯滅」

など、ともしびを題材にした詩を多く詠じたが、その詠灯詩についても、「残灯」は白居易が好んで用いた語」とされる一方、「それらの詩の世界では、灯火はすなわち道真自身であった。ただ一点の光を放って深夜の闇を照らす孤独なともしび。道真は、そんなともしびに自分自身を重ねることを好んだのである」と言われ、また「道真が影響を受けた白居易の詩には、作者と灯心がこのように一体化した例は見出すことができない。それは、おそらくは道真が作り出した、独自の表現であった」とも言われている^⑧。

菅詩と白詩との距離については、白詩に見える人生の閑適を楽しむ思想が道真には見られないといわれるほか、道真詩には「白詩の表現や題材などに拠り沿いながら、その本質的な詩趣に乖離的傾向が見られる」などと指摘されるとおりであるが、ここで注目されるのは、道真の詠物詩においては、詩人自身の姿を象徴する存在として「残菊」「竹」「灯火」「蟬」などの物が機能するという傾向である。このような表現手法は決して白居易的ではない。それでは、道真はそのような表現の次元に自ら到達したのだろうか。筆者は、道真が白居易以外の詩人に関心を持っていた可能性をまず考えたい。そして、そうした詩人として盛唐の杜甫を想定し、次節以下

において、この想定を裏付けてみたい。

三、杜詩との関連

(1) 「鵑」詩について

『菅家文章』に「鵑」を詠んだ詩が二首ある。このうち「見鵑鳥戲前池有感」は、道真の詠物詩の中で言志を含む最初の作品である。

④ 春日於「相国客亭」、見「鵑鳥戲」前池「有感」、賦詩（『文章』、卷二101）

人知^二鳥意^一「鳥知^レ人、莫^レ道沙鵑素性馴。非^下与^二紫鱗^一争^上楽^レ水、将^レ欲^二霜翹不^レ同^レ塵。当時未^レ謂浮沈定、数処唯無^二去就頻^一。棲息若容^二三四日^一、遂生何必入懷^レ仁。」

この詩は元慶七年（883）春、藤原基経客亭の作文会で作られた一首であり、前年の藤原冬緒匿詩事件の嫌疑に対する憤りと感慨を詠んでいる。道真は『列子』黄帝篇にある「鵑鷺忘機」の典故を踏まえながら、自らを「沙鵑」になぞらえ、わが心を知る賢士だけには馴れるが、小人のはびこる世間の俗塵にはまみれてしまいたくないという気持を詠み込んでいる。

る。

一方、杜甫は一生、好んで「鵑」を詠み続けた。杜詩の中で、点景を含めて、「鵑」を詠む句は四十句をくだらない。また、杜甫の「鵑」には、詩人自身の生涯における各時期の境遇が託されており、「鵑」詩人」という図式が明確に読み取れる。例えば、「飄飄何所^レ似、天地一沙鵑。」（「旅夜書懷」、「詳注」、卷十四）と詠まれる孤独・漂泊なる「沙鵑」、「自去自来梁上燕、相親相近水中鵑」（「江村」、「詳注」、卷九）と詠まれる自適する「水中鵑」などがそうである。

杜詩以前にも、「鵑鷺忘機」の故事が濫觴となり、名利に淡泊な隱者の象徴として「鵑」を詠む伝統が見られるものの、杜甫の吟詠によつて多様な「鵑」のイメージが新たに形成されていた。¹² この中には、道真の「鵑」詩との直接的な関連が認められる作例が看取される。

(a) 奉^レ贈^二韋左丞相丈^二二十二韻¹³（『詳注』、卷一）（前略）今欲^二東入^レ海、即將^二西去^レ秦。尚憐終南山、回首清渭濱。常擬^レ報^二一飯^一、況懷^レ辭^二大臣^一。白鵑没^二浩蕩^一、万里誰能馴。

「奉贈韋左丞相丈二十二韻」は杜甫早期の詩作であり、長安における不遇の生活にあき、何度目かの東方の旅に出よう

として、尚書省の要人韋済を辞する詩である。一首の主題は自己の能力と境遇との間の不合理な不釣合であるが、最後の聯で自由を求める「白鷗」に自分を擬して、「万里誰能馴」と激しく主張する。詳注に、「白鷗、承_レ入_レ海来、用_二海客事_一、属在_二自己_一説」とある。この句は『文選』卷二十一、宋の顔延之の「五君詠」が、自由人の代表である魏の嵇康を「龍性誰能馴」と詠んだ句を踏まえているが、後年、四川で薛稷が描いた鶴の画を詠んだ詩作にも「冥々任_レ所_レ往、脱略誰能馴」(「通泉県署壁後薛少保画鶴」、『詳注』、卷十一)と、同様の表現が見える。一方、道真は、前掲の④「見鷗鳥戲前池有感」の中で杜甫と似たような表現と発想で「莫道沙鷗素性馴」と詠み、鷗が生まれつき人に馴れる性質だと思ふな、と憤懣を言う。また、「晚秋二十詠」の「水鷗」(『文章』卷二、171)に「尋_レ声向背馴」と見えるほか、「晴砂」(『文章』卷二、170)にも「老鶴馴知_レ意」の句があるなど、いずれも道真が杜詩の表現を取り入れたことを示していると考えられる。④「見鷗鳥戲前池有感」と杜詩との関連はさらに次の一首からも看取される。

(b) 独立(『詳注』、卷六)

空外一鷺鳥、河間雙白鷗。飄飄博擊便、容易往来遊。草

露亦多_レ湿、蛛糸仍未_レ収。天機近_二人事_一、独立万端憂。

乾元元年(758)、杜甫の直属の上司であった房琯が肅宗の新朝廷から追放されるのに伴い、杜甫もその一派として華州司功參軍に左遷された。「独立」はそうした仕途の險惡を詠んだものであり、詳注は、「此詩托_レ物興_レ感、有_二憂_レ讒畏_レ讒之意_一」、そして「鷺鳥、比_二小人之媚嫉_一者。白鷗、比_二君子之幽放_一者」と解す。道真詩に見られる「沙鷗(君子)——紫鱗(小人)」という対立は、「独立」における「白鷗(君子)——鷺鳥(小人)」の図式と完全に合致しているといえよう。このように、道真は杜甫と同じように、自由と高潔を志向する「不馴者」としての「鷗」に自分自身をなぞらえたのである。

(2) 「雁」詩について

ところで、道真は「鷗」よりも「雁」を多く詠じている。

「孤雁」(『文章』、卷二・165)、「聞早雁寄文進士」(『文章』、卷四・265)、「重陽後朝、同賦秋雁槽声来、応制」(『文章』、卷五・349)、「重陽節侍宴、同賦天淨識賓鴻、応制」(『文章』、卷五・379)、「聞旅雁」(『後集』・480)などは、いずれも「雁」を題材にした詩作である。そのうち、「聞早雁寄文進

士」は、道真の讃州時代の作品で、雁の叫びを聞いて詩人の旅愁がかきたてられたことを詠んだ一首である。この詩には杜甫の夔州時代の「夜」詩と類似するところが多い。

⑤ 聞「早雁」寄「文進士」〔「文章」、卷四・265〕

無_レ勝「早雁」叫傷_レ情、砂漠涼風送「遠行」。不_レ見「家人書便附」、唯煩「旅客」夢難_レ成。下弦秋月空驚_レ影、寒槽曉舟欲_レ乱_レ声。憶汝先來「南海上」、夜尋「落魄」舊能鳴。

(c) 夜〔詳注〕、卷十七〕

露下天高秋水清、空山独夜旅魂驚。疏灯自照孤帆宿、新月猶懸双杵鳴。南国（一作南菊）再逢人臥病、北書不_レ至雁無_レ情。步簷倚_レ杖看「牛斗」、銀漢遙應_レ接「鳳城」。「夜」は詠物詩ではないにもかかわらず、流落地で眠れぬ夜を過ごさねばならない詩人の身の上が⑤の道真の詩と共通する。さらに、秋の夜の景色（「下弦秋月」―「新月」、「寒槽曉舟」―「疏灯孤帆」、状況（「旅客夢難成」―「独夜旅魂驚」、情緒（「傷情」―「無情」、詩語表現（「驚影」―「魂驚」、「落魄」―「旅魂」、「南海」―「南国」、典故（「不見家人書」―「北書不至」、ないし押韻の運用において、両首が非常に似通っていることが一見して窺われよう。

また、太宰府に左遷された道真がその地で初めて作った詠

物詩も「雁」の詩である。

⑥ 聞旅雁〔「後集」、480〕

我為「遷客」汝來賓、共是蕭々旅漂身。敲_レ枕思量歸去日、我知「何歲」汝明春。

この詩は初唐の韋承慶の「南中詠_レ雁」が「万里人南去、三春雁北飛。未_レ知「何歲月」、得_レ与「尔」同歸」と詠むのを踏まえたものと指摘されている¹⁴⁾。また、帰雁を見て望郷の思いが呼び起こされる作例は、たとえば白居易にも「帰雁_レ思_レ郷心」、平湖断_レ人目」（「白氏文集」、卷十、「孟夏思_レ渭村旧居」寄_レ舍弟」0509）と見える。しかしながら、ここで注意されるのは、道真の「雁」に流落の悲しみと望郷の思いとが同時に託されている点である。というのも、実は、杜甫も数多くの「雁」詩を詠じており、漂泊するわが身を「雁」になぞらえつつ、同時に望郷の念をも「雁」に託すという詠み方は、杜甫の詩にもっとも典型的に見られるからである。

(d) 官池春雁二首〔詳注〕、十二〕

自_レ古稻梁多不_レ足、至_レ今鶻鵬乱_レ為_レ群。且休_レ悵望看_レ春水」、更恐婦飛隔_レ暮雲」。

青春欲_レ尽急還_レ郷、紫塞寧論有_レ霜。翅在雲天終不_レ遠、力微嬾_レ繳絶_レ須_レ防。

(e) 帰雁二首（『詳注』、二十三）

万里衡陽雁、今年又北歸。双双瞻客上、一一背人飛。
云里相呼疾、沙辺自宿稀。繫書元浪語、愁寂故山薇。

欲雪違胡地、先花別楚雲。却過清渭影、高起洞庭群。塞北春陰暮、江南日色曛。傷弓流落羽、行斷不堪聞。

用例（d）「官池春雁」の寓意は「春雁」にあり、詳注は「首章比逆旅無_レ依」、「下章比欲_レ歸無_レ資」とする。用例（e）「帰雁」について、詳注はまた「首章、見_レ帰雁_一而切_二故郷之思_一。」「次章、傷_レ帰雁_一而興_二飄泊之感_一。」と云う。そのうえ、前掲した用例（c）「夜」詩に「北書不至雁無情」と見える雁書の手紙を、（e）の「帰雁」においても、「繫書元浪語」と、同じく用いて悲しむ。これらの用例を通して分かるように、杜詩の雁には漂泊・羈旅と望郷・書簡往来のイメージがつねに融合されており、交互に深化を促し合っていた。安史の以後に、杜甫が「雁」ことに「帰雁」「孤雁」を繰り返し詠じていたことや、そうした吟詠によって、後世の範となる「雁」詩の經典ともいふべきものが確立されたことが指摘されている。¹⁵ こう見てくると、道真の「聞旅雁」に見える、「雁」に詩人の境遇と郷愁を重ねて託すとい

う詠み方は、杜詩に通じているのではなからうか。また、⑤「聞早雁寄文進士」の「不見家人書便附」以外に、『菅家後集』の最後に載る「謫居春雪」においても、道真は「雁足黏將疑_レ繫_レ帛」と雁書の手紙を用いて、流落の悲しみと望郷の思いを尽くしている。道真の「雁」詩は素材、表現、また手法などの面で杜甫の詩に導かれたと考える。

(3) 「蟬」詩について

さらに、道真詩と杜詩との関連は、前掲の②「聞蟬」にも見られる。「聞蟬」の前半は、「泥行」をようやく免れたものの、「危葉」に身を寄せながら「露」によって身を養うという蟬の生態を詠むことで、派閥闘争が激しく、誹謗中傷などの危険が潜んでいる官僚・文人社会の中でかろうじて高潔を守った作者自身の境遇をいうものであろう。後半の「猶恨凄凉風未到、不能一旦自無声」は、本来秋に鳴くはずの蟬が、まだ夏だというのに一時も無声ではいられず、鳴き続けずにはいられないということで、そうした蟬のあり方に、嫉妬、誹謗、中傷の的になりながらも、潔白を主張し、不条理な世路に対する憤懣を詩に詠み続けた道真の姿を重ねたものと考えられる。¹⁶

ここで興味深いのは「不能一旦自無声」における「無声」という表現である。「声を費やしたくない、沈黙を守りたい」と考える蟬の造型といえ、晩唐詩人李商隱の「蟬」詩にある「本以^レ高難^レ飽、徒勞^レ恨費^レ声。」が思い出されよう。そして、唐詩の通時的な流れの上では、李商隱の「蟬」に至る途上に、杜詩の「静かな蟬」がある。

(f) 秦州雜詩 其四(『詳注』、卷七)

鼓角緣^レ辺郡、川原欲^レ夜時。秋聽^レ殷^レ地発、風散^レ入^レ雲悲。
抱^レ葉寒蟬靜、歸^レ山独鳥遲。万方声一概、吾道竟何之。

本来けたたましく鳴くはずの蟬が、葉にじっとへばりついて、ひっそりと声を潜めている。「蟬が登場する詩句の系譜のなかで、杜甫のこの句はいかにも異質である」と川合康三氏が指摘している。¹⁷⁾「無声」の蟬は早く『楚辞』九弁に「燕翩翩其辞^レ帰兮、蟬寂漠而無^レ声」とあるのに連なるが、¹⁸⁾『楚辞』より後、杜甫に至るまで鳴く蟬しか詠まれなかった。道真の「聞蟬」における「無声」という表現は『楚辞』の発想を生かした可能性もあるが、想起したいのは「無声」の詩語をもっとも愛用した詩人もまた杜甫であるという点である。杜詩において、「無声」の語は六、七例見られるが、それは万物を潤して細やかに音を立てずに降る春雨についていうもの

や(春夜喜雨「随^レ風潜^レ入^レ夜、潤^レ物細^レ無^レ声」)、鳴き声を立てずにすばやく飛び去る隼の様子を表す表現や(朝「二首」俊鶻無^レ声過)、あるいは無声の琴を詠むものなど(過「津口」膝有^レ無声琴)、さまざまな場面に用いられている。また、『菅家後集』(484)には「叙意一百韻」の「旅思排^レ雲雁、寒吟抱^レ樸蟬」という句もある。この「抱樸(樸を抱く)」蟬の表現は、(f)「秦州雜詩」の「抱葉(葉を抱く)」蟬の表現に極めて近い。こうした、「聞蟬」をめぐる窺われる杜詩と道真詩とのいくつかの符合は、決して偶発的な事象ではなく、道真詩における蟬の表現が杜詩を契機として生まれたためではないだろうか。

(4) 「雨」詩について

また、道真の詠物詩のうち、ここで考察しておきたい今ひとつ重要な題材として「雨」がある。「雨」を詠じた詩では杜詩との関連がより明確な形で現れている。次の二首は流謫地の太宰府で詠まれた「雨」の詩である。

⑦ 夜雨(『後集』、500)

春夜漏^レ非^レ長、春雨氣^レ応^レ暖。自然^レ多^レ愁者、時令如^レ乖^レ狼^レ一。心寒雨又寒、不^レ眠夜不^レ短。失^レ膏^レ稿^レ我^レ骨^レ一、添

涙^レ泣^二我眼^一。脚氣与^二瘡癢^一、垂^レ陰身遍滿。不啻取^二諸身^一、屋漏無^二蓋板^一。架上濕^二衣裳^一、篋中損^二書簡^一。況復厨兒訴、竈頭爨煙斷。農夫喜有^レ余、遷客甚煩懣
(後略)

⑧ 風雨(『後集』、507)

朝々風氣勁、夜夜雨声寒。老僕要^レ綿切、荒村買^レ炭難。
不^レ愁茅^二屋破^一。偏惜菊花殘、自有^二年豊稔^一、都無^二叶^一口^一食^一。

「夜雨」や「風雨」の中では、配所での陰惨な生活状況が描かれ、詩人の憂憤と悲愁の情がせつせつと表出されている。詩中の「茅屋破」「不眠夜不短」「屋漏無蓋板」「湿衣裳」「要綿切」などの表現は、直ちに以下に掲げる杜甫の名作「茅屋為秋風所破歌」を連想させるのではなからうか。

(g) 茅屋為「秋風所」破歌(『詳注』、卷十)

(前略) 布衾多年冷似鉄、嬌兒惡臥踏^レ裏裂。牀頭屋漏無^二乾処^一、雨脚如^レ麻未^二断絶^一。自^レ經^二喪乱^一少^二睡眠^一、長夜沾湿何由徹。(後略)

掲出した箇所について、詳注は「此傷^二夜雨侵迫之苦^一。」と云う。また、⑧「風雨」においては、秋風苦雨による寒さを詠む一方で、「自有年豊稔、都無叶口食」と、食糧がない

ことを歎いている。この句は、杜甫の「春夏各有^レ実、我飢豈無^レ涯」「喜晴」、『詳注』、卷四)を裏返した形で踏まえていると見ることができる。

道真は、「叙意一百韻」の中でも、流涕地で食に事欠くような厳しい状況に置かれた様子を「野豎供^二蔬菜^一、厮兒作^二薄饘^一。瘦同^二失雌鶴^一、飢類^二嚇雛鶩^一。」と詠出している。一方、杜甫は「杜陵老布衣、飢走半^二天下^一。」と言われるほどつねに貧窮飢寒に苦しみ、中でも「幼兒飢已卒」「自^レ京赴^二奉先^一嵬^一詠^二懷五百字^一、『詳注』、卷四)という人生の苦難を極めた悲惨な体験が知られる。杜甫の詩に飢餓の表現が多く見られることと、杜詩以前の詩にはこうした表現がほとんど見られないことについては、既に指摘がある^⑧。ここでは、そうした飢餓の表現の中に道真詩との関連が窺われるものが見出されることに注目したい。

○落雁迷^二沙渚^一、飢鳥集^二野田^一。(『晩行口号』、『詳注』、卷五)

○独鶴不^レ知^二何事舞^一、飢鳥似^レ欲^二向^レ人啼^一。(『野望』、『詳注』、卷十二)、

○老雁春忍^レ飢、哀号待^二枯麦^一。(『送^二李校書^一二十六韻』、『詳注』、卷六)

○山寒青兒叫、江晚白鷗飢。（雨四首）其四、『詳注』、卷二十）

○故畦遺穗已蕩尽、天寒歲暮波濤中。鱗介腥膻素不食、終日忍飢西復東。（白鷗行）、『詳注』、卷二十三）

こうした飢えた「鳥」「雁」「鷗」「鳧」の多くは詩人自身を喩える表現となっているが、その点で、「叙意一百韻」において「瘦同_レ失_レ雌鶴」、飢類_二嚇_一雛鳶」といい、自らを「瘦せた鶴」「飢えた鳶」とする道真の表現と一致しているといえよう。

このように、道真の詠物詩は題材、表現、手法などの面において杜詩との関連が多く見られる。特に日本の詠物文学の歴史という視点から見た場合、題材となる物に詩人自身の境遇を託すという言志の手法が、道真と杜甫との間で共通している点は、重要な意義を有しているものと考えられる。そこで節を改め、この点についてさらに深く考察してみることとしたい。

四、中国詩における「托物言志」の消長

道真も杜甫も国の将来を一生憂う儒臣であった。流落地で

帰郷の望みもかなわぬまま、不遇の中に一生を終えたという点においても二人は一致している。道真詩に見られる杜詩の影は、先ずはこうした境遇上の相似によるものと考えられよう。道真詩に人生の閑適を楽しむ思想が見られないというのもまた、こうした詩人の境遇と深く関わっているように思われる。

しかし、「托物言志」の手法は中国詩において長い伝統をもつものであり、上に見てきた道真詩と杜詩との関連はさらに中国の詠物詩の流れの中で捉える必要がある。

唐までの詠物詩の発展ぶりについて、「比興体」（屈原→鮑照）から、「賦体」（沈約→李嶠）へ、さらに「賦比興結合体」（杜甫→李商隱まで）へと展開したことが李定広氏によって指摘されている。²¹こうした道程は、まさしく中国詩における「托物言志」の消長を反映しているように思う。まず、戦国時代の屈原から劉宋の鮑照までの第一段階においては、「詠物の祖」とされる屈原の「橘頌」が、橘樹の様子を立派で高潔な人格にたとえ、詩人みずからの忠信の道を託したがゆえに、「托物言志」「状物抒情」の手法を切り開いた。そして、こうした手法は、ひとまず齊梁兩朝までの詠物詩に継承された。前漢の伝班婕妤作「团扇歌」（怨歌行）、魏の曹植

の「吁嗟篇」、宋の鮑照の「梅花落」などは、その代表的な作品である。この時期の詠物詩が、その特徴を「比興体」とされるのは、物自体に対する描写が粗略なためだろう。そもそも、魏晉時代の詩学思想は、「天人感応」の自然観のもとで展開された「感物興思」というものであり、詠物詩における物が「思」あるいは「感情」を催すための媒介的存在となっているのは、そのためだと考えられる。

第二段階は梁の沈約から初唐の李嶠までである。晋宋以降、玄学と仏教が思想の主流を占めるようになるにつれて、「体物」詩学が確立し、「物」が感興を引き起こすためのものから独立した審美の対象に変わっていった。この時期に盛行したのはいわゆる「写物図貌」の詠物詩であり、言志の作品は詩壇の表舞台から姿を消すこととなっていたのである。「單純写物」の手法はそもそも詠物賦に由来しているので、体物の詠物詩はまた「賦体（詠物詩）」と呼ばれている。

第三段階について、李定広氏は初唐から盛唐までの詠物詩を扱っていないが、初唐の駱賓王と陳子昂から晩唐の李商隠までを第三段階としてよからう。よく知られているように、初唐以降、宮廷の貴族によって集団で作られていた文学は、科挙出身者を中心とする人々により、個人の志向や感情を表

現する文学へと変質していった。駱賓王の「在獄詠蟬」、陳子昂の「修竹篇」などは「托物言志」の名作であり、特に陳子昂が「与東方左史虬修竹篇」において「風骨」と「興寄」を提唱した文学論は画期的なものであった。しかし、駱賓王や陳子昂たちの詠物詩は古代の詩精神への復帰を目指したもので、物はやはり「思」あるいは「感情」を催すための媒介的存在という域を超えていなかったように思われる。それゆえか、王夫之（『姜齋詩話』）は「詠物詩、齊、梁始多有之。其標格高下、猶画之有匠作。有士氣、征故實、写色沢、広比譬、雖極鏤繪之工、皆匠氣也。又其卑者、餽湊成篇、謎也、非詩也。……至盛唐以後、始有即物達情之作。」²³といい、すなわち齊・梁以後、盛唐に至って始めて詠物詩に言志が表されたと捉えている。ここで王夫之のいう「即物達情」の詩作とは、盛唐の詩人杜甫によって極められた、「托物言志」の究極的な範式だと考えられる。このことは、南宋の張戒『歲寒堂詩話』の記述によっても裏づけられている。張戒は「建安、陶、阮以前、詩專以言志」²⁴。潘、陸以後、詩專以「詠物」。兼而有之者、李、杜甫の名を挙げながら、その後、杜甫の詩境を主

題として述べるのみで、李白については詳しく論じていない。²⁴⁾ 実際のところ李白の詠物詩はいわゆる「略貌取神」の作が多く、²⁵⁾ 張戒にとって詠物の達人には、詠物における緻密さと言志における鮮明さを統合した杜甫のほうが李白よりもふさわしいということになるのではなからうか。杜甫の詠物詩が「比興」と「賦体」とを融合させた「賦比興結合体」と捉えられたゆえんはこうしたところにある。杜甫以後の中唐詩人は、杜詩の流れを汲みながら、独自に詠物詩を展開させていった。白居易の場合は諷諭類と寓言類の詠物詩を数多く作り、その特色は寓理性にあると言われる。晩唐に現れた詠物詩の大家は李商隱であるが、李詩における対象物が詩人自らの境遇や内面と不可分に結びついた点については杜甫の影響を強く受けたものと指摘されている。²⁶⁾ このように、中国詩における「托物言志」の流れの中で、杜甫はもともと大きな存在として屹立しているのである。

ところで、杜甫によって達成された「即物達情」の詩作とは具体的にどのような作であらうか。よく知られるものだが、杜甫の詠物詩の中で、「馬」の詩がもともと代表的である。開元二十八年(740)か二十九年に作られた「房兵曹胡馬」の駿馬、天宝十四載(755)に作られた「驄馬行」の驄馬、そし

て至徳二載(757)の「瘦馬行」の瘦馬、乾元二年(759)「病馬」の病馬は、いずれも作者自身の投影であり、詩人の各時期の境遇が託されたものとして、それぞれの作品は従来高く評価されている。²⁷⁾ ここで指摘したいのは、こうした「物」と「我」を一体化させる手法は、前述した杜甫の「鵑」や「雁」などの詩に通じるものであり、このような詠物詩こそ王夫之のいう「即物達情」の詩作ではなからうか。

五、道真詩の独自性

一方、道真の詠物詩にも杜詩と同じような表現手法が用いられている。このことは道真が詠物詩の「大成者」杜甫の精髓を継承したことを示すのではなからうか。通説では、日本において杜甫の作品がまとまった形で注目されるようになったのは、平安後期以後であると言われる。しかし、道真が杜甫の詩を読んでいたという文献上の確証が未だ見出せないとしても、受容関係を示唆する本文上のつながりが確認できる。また、道真の作品に顕著にその影響が窺われる白居易・元稹らの唐人による杜詩評価を看過することもできない。白居易「与元九書」には、「風雅比興……杜詩最多、可_レ伝者千余

篇」とある。また、元稹の「唐故工部員外郎杜君墓係銘」序には、「至_二於子美_一、蓋所_レ謂上薄_二風騷_一、下該_二沈宋_一、古傍_二蘇李_一、氣奪_二曹劉_一、掩_二顔謝之孤高_一、雜_二徐庾之流麗_一、盡得_二古今之體勢_一、而兼_二人々之所_レ獨專_一矣。」とあるが、これは、それまでの詩の歴史を集大成する存在として杜甫を位置づけ、非常に高く評価したのである。『旧唐書』所収の杜甫伝に引用されたこの序文は、中唐以降の杜詩論に非常に大きな影響を投げかけることになったが、こうした杜詩に対する尊崇の態度を道真が察知し、それに注目した可能性は十分に考えられるものではなからうか。

ところで、道真が杜詩の手法を受け入れたと言えるならば、道真詩の独自性はどこにあるのだろうか。この問題を、道真の宰相・丞相時代の詠物詩の詠みぶりを考察することによって考えたい。前述したように、言志が含まれる道真の詠物詩は、多く左遷や流謫の時期に詠まれたものである。それに対して、不遇でない時期の詠物詩には待宴応制のものが多い。

このことから、道真の作詩が、その作詩の場に応じたものであったことが窺われる。ところが、道真の宰相・丞相時代の応制詩には、前掲①「早春侍宴、同賦殿前梅花、応制」のよな「異色」とも呼び得るものも見られる。この詩は、寛平

九年（897）正月の内宴で、清凉殿の前庭の梅花を賦したものが、本来王沢を歌うべき応制詩の慣例に従わず、いよいよ風流志向を強めてゆく宇多天皇を諷諫している。ここで特に注目されるのは、「請莫多憐梅一樹、色青松竹立花傍」の「松竹」が道真自身のことを寓したものだという点である。同じような発想は、寛平七年の「春、惜桜花、応制」（『文章』、巻五・384）詩序にも見られる。

花北有_二五粒松_一、雖_レ小不_レ失_二勁節_一。花南有_二数竿竹_一、雖_レ細能守_二貞心_一。人皆見_レ花、不_レ見_二松竹_一。臣願我君兼惜_二松竹_一。

桜花を惜しむ詩宴であるにもかかわらず、撰定された詩題を退け、敢えて松竹をも惜しみ給え、というのである。そして、ここでも「松竹」が道真自身のことを象徴するものとして機能している。

また、寛平二年「未旦求衣賦」（『文章』、巻七・516）の序文には「有_レ勅曰、賦者古詩之流、詩蓋志之所_レ之。各賦_二一篇_一、具言_二汝志_一。詩云賦云、一文一字、不_レ可_レ風_二雲其興_一、不_レ可_レ河_二漢其詞_一。未_レ旦求_レ衣、欲_レ陳_二人主思_レ政之道_一。寒霜晚菊、欲_レ叙_二人臣履_レ貞之情_一。」とあり、詩賦は一文一字も現実から遊離した空疎なものがあってはならない、寒霜

晩菊といった自然の風物も、「人臣履貞之情」の比興でなくてはならないのである。道真のこの主張について、藤原克己氏は「比興表現による政治的言志という創作理念」だと指摘している、宰相・承相時代の言志的詠物詩は、まさにそのような創作理念に支えられた実践作だと思われる。また、これらの詩作に、題材となるものに詩人自身を投影するという手法が見られるのは、道真が杜甫に倣った「言志」の表現手法を、杜甫が用いなかった場で用いたものと考えられる。筆者は、そこに詩人道真の独自の達成があるのではないかと考える。

終わりに

道真と杜甫の関連について、早期に言及したものに、川口久雄、若林力両氏の考察がある。^{③④}最近では王京鉦氏が、道真と杜甫との詩語表現における類似性についての継続的な考察を行っているほか、宇野直人氏も道真の詩に杜甫の表現がちりばめられていることを指摘した。^{⑤⑥}

本稿においては両者の関係を「詠物」という視点から検証してきた。この考察を通じて、道真の中国詩受容をめぐる研

究は、杜甫の存在を抜きにしては進められないことが明らかになったと考える。今後、杜詩受容の可能性を想定し、検証すること、詩人としての道真像、道真の文学のあり方をより立体的に復元できるのではないだろうか。

〔付記〕本稿は、国際交流基金日本研究フェローシップによる研究に端を発し、二〇一五年九月に早稲田大学日本古典籍研究所で行った講演をもとに成稿した中国語の論文「菅原道真的詠物詩與杜甫詩歌的関連」（『日語学習與研究』、二〇一八年第二号）を増補・改正したものである。その間、諸先生方には折に触れて様々なご意見をいただいた。また、成稿にあたっては山田尚子氏よりご助言をいただいた。皆様に心より感謝を申し上げる。

- ① 拙稿「詠物と言志——『懷風藻』から勅撰三集に至る」（河野貴美子、ヴィーブケ・デーネーケ編『日本における「文」と「ブンガク」』、『アジア遊学』第一六二号、二〇一三年）
- ② 本論では詠物詩を広義的に捉えている。たとえば、「舟行五事（一）」（卷三、236）は典型的な詠物詩題でないにもかかわらず、内容的には海辺の一本松を詠んだもので、詠

- 物語に数えた。そして、「菊散一叢金」(巻六、460)のような句題詩も、その内容によって詠物詩だと断定した。詳しくは拙論「詠物詩の概念とその判定」(『早稲田大学古典籍研究所年報』第十号、二〇一五)を参照されたい。
- ③ 本文はそれぞれ小島憲之『国風暗黒時代の文学』下I(塙書房、一九九一年)、日本古典文学大系・川口久雄校注『菅家文草 菅家後集』(岩波書店、一九八七年)に拠る。
- ④ 「詩言志」に関する中国古典文学の研究史の整理は、小川靖彦『山上憶良とハ言志』(『青山語文』第四三号、青山学院大学、二〇一三年三月)に詳しい。
- ⑤ 平岡武夫・今井清校訂『白氏文集』(京都大学人文科学研究所、一九七二年)による。
- ⑥ 菅野札行「菅原道真の残菊の詩の独自性」(『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』、第二章「菅原道真の詩における文学特質の研究」、第三節「道真の文学と白居易の文学」、大修館書店、一九八八年十月)。
- ⑦ 後藤昭雄「菅原道真の詠竹詩について」(『香椎湯』第二七号、一九八二年三月)。また、前掲注6菅野論文も、「生来まっすぐな貞節を有しながら、雪の重みで低れさがり、ついに破れ裂けている竹もあるだろう」というのは、それはそのまま流滴の地における道真の姿でなくてはなんである」と指摘している。
- ⑧ 山本登朗「灯火と孤心——菅原道真の詩の世界」(『礫の会、記念特集『短歌と国文学』第五集、一九九八年六月)。
- ⑨ 大曾根章介「菅原道真——詩人と鴻儒」(『日本漢文学論集』第二巻、汲古書院、一九九八年)、鎌田正「道真の詩における白氏文集の投影」(『東京成徳短期大学紀要』一、一九九六年八月)、菅野札行「道真の文学と白居易の文学」(『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』、第二章「菅原道真の詩における文学特質の研究」、大修館書店、一九八八年十月)。
- ⑩ 前掲注⑨菅野論文。
- ⑪ 注③所掲「菅家文草 菅家後集」の補注一〇一を参照されたい。
- ⑫ 蘭香梅「漂泊與自由——杜詩中「鷓鴣」鳥的意象」(『杜甫研究學刊』一九九八年第一期)、張浩遜「杜詩「鷓鴣」意象補說」(『杜甫研究學刊』二〇〇一年第一期)。
- ⑬ 本文は(清)仇兆鰲注「杜詩詳注」(中華書局、一九七九年)に拠る。
- ⑭ 惠版友紀子「和漢朗詠集」の雁——三一七番 韋承慶の詩をめぐる(『和漢比較文学』第三二号、和漢比較文学会、二〇〇三年八月)。
- ⑮ 羅寧「杜甫詩中の雁意象和詠雁詩」(『湖南師範大学社会科学學報』、二〇一五年第六期)。
- ⑯ 「旦」の意味について、大系本の中では「ひとたび」の意とし、副詞として捉えられているが、筆者は名詞だと考え、「しばらくの間」と解する。また、「寒蟬」に道真自身の姿が重ね合わされていることについては、劉小俊氏にも指摘がある。詳しくは劉小俊「新撰万葉集」上巻三四番の漢詩について——「蟬」の詠み方と菅原道真との関わりをめぐる(『和漢比較文学』第四六号、和漢比較文学会、二〇一一年二月)を参照されたい。
- ⑰ 川合康三「中国のアルバ——系譜の詩学」(『蟬の詩に見る詩の転変』(汲古書院、二〇〇三年)。
- ⑱ 前掲注⑰川合論文。
- ⑲ 宋・李綱撰「梁溪集」(『読四家詩選四首 子美』)の首聯に見える。
- ⑳ 後藤秋正「杜甫の詩における飢餓表現」(北海道教育大学紀要、人文科学・社会科学編、第六一卷第二号、二〇一一年二月)。

- ②1 李定広「論中国古代詠物詩の演進邏輯」(『中山大学学報』(社会科学版)、二〇一五年第四期第五卷)。
- ②2 王夫之『清詩話 上冊』(上海古籍出版社、一九六三年)。
- ②3 丁福保『歷代詩話続編』上(中華書局、二〇〇六年)に拠る。
- ②4 興膳宏「歳寒堂詩話の詩人論——杜甫と白居易を中心に」(『東方学』第九十二輯、東方学会、一九九六年七月)を参照されたい。
- ②5 蘭甲雲「簡論唐代詠物詩發展軌跡」(『中国文学研究』、一九九五年)。
- ②6 浅見洋二「李商隱の詠物詩」(『集刊東洋学』第五四冊、一九八五年一月)を参照されたい。
- ②7 清・施補華『峴傭說詩』に「少陵馬詩、首首不同、各有寄託、各出議論、各見精彩。」とある。
- ②8 『元稹集』卷五六(中華書局、一九八二年)による。
- ②9 藤原克己「詩人鴻儒菅原道真」(『菅原道真と平安朝漢文学』Ⅲ菅原道真の詩と思想、東京大学出版会、二〇〇一年)。
- ③0 川口久雄『平安朝日本文学史の研究』四頁(明治書院、一九六〇年)、若林力「道真の詩に見える杜甫の影」(川口久雄「古典の変容と新生」、明治書院、一九八四年)。
- ③1 王京鉦「菅原道真の百韻詩における杜甫百韻詩の投影について」(九州中国学会報「第三八号、二〇〇〇年)、「道真詩歌中的杜甫詩語受容問題再認識」(『遼寧工業大学学报』(社会科学版)二〇一三年十月)、「菅原道真与杜甫逐臣思君主旨詩歌中的意象同質性——『九月十日』和『至日遣興』為例」(復旦大学中国古代文学研究中心主弁『中国文学研究』第二三輯、二〇一四年七月)、「道真の漢詩における「猿・鳥」と杜甫詩における「猿・鷗」」(福岡教育大学国語科研究論集第五六号、二〇一五年三月)。
- ③2 宇野直人「儒臣の本懐——菅原道真」(『こころをよむ 漢

詩に見る日本人の心』、NHK出版、二〇一五年四月)。

(しょう・ぎぎょう 北京師範大学准教授／

成城大学客員教授)

(表) 『菅家文草』『菅家後集』における詠物詩

| | 詩題 | 巻数・詩番 | 詩体 | 創作時期 | 言志の有無 |
|----|---------------------|--------|--------|---|-------|
| 1 | 月夜見梅花 | 巻一・1 | 五言絶句 | 少年時代 (斉衡二年) (十一歳) | |
| 2 | 残菊詩 | 巻一・3 | 五言排律 | 修業時代 (貞観二十一 二年) (十六歳一 十六歳) | |
| 3 | 賦得赤虹篇、一首 | 巻一・4 | 七言排律 | | |
| 4 | 賦得詠青、一首 | 巻一・5 | 五言排律 | | |
| 5 | 賦得躬桑、一首 | 巻一・6 | 五言排律 | | |
| 6 | 賦得折楊柳、一首 | 巻一・7 | 五言排律 | | |
| 7 | 翫梅花、各分一字 | 巻一・11 | 七言絶句 | | |
| 8 | 秋風詞 | 巻一・13 | 五言排律 | | |
| 9 | 喜雨詩 | 巻一・25 | 五言排律 | | |
| 10 | 詠瞿麦花呈諸賢 | 巻一・29 | 七言絶句 | | |
| 11 | 晚冬過文朗中、翫庭前早梅 | 巻一・49 | 七言絶句 | | |
| 12 | 翫秋花 | 巻一・54 | 七言律詩 | | |
| 13 | 残燈、風韻 | 巻一・60 | 七言絶句 | | |
| 14 | 早春侍宴仁寿殿、同賦春雪映早梅、応製 | 巻一・66 | 七言律詩 | 新進官僚時代 (貞観十三一 十八年) (二十七歳一 三十二歳) | |
| 15 | 早春、陪右丞相東斎、同賦東風粧梅、応製 | 巻一・67 | 七言排律 | | |
| 16 | 書斎雨日、独对梅花 | 巻一・68 | 七言律詩 | | |
| 17 | 九日侍宴、同賦紅蘭受露、応製 | 巻二・70 | 七言律詩 | | |
| 18 | 早春、侍内宴、賦聴早鶯、応製賦聴早鶯 | 巻二・83 | 五言律詩 | 文章博士 (元慶元一九 年) (三十三歳一 四十一歳) | |
| 19 | 早春、侍内宴、同賦雨中花 | 巻二・85 | 七言律詩 | | ○ |
| 20 | 春日於相国客亭、見鷗鳥戲前池有感 | 巻二・101 | 七言律詩 | | |
| 21 | 水中月 | 巻二・116 | 七言律詩 | | |
| 22 | 題白菊花 | 巻二・125 | 七言律詩 | | ○ |
| 23 | 感小蛇、寄田才子、一絶 | 巻二・142 | 七言絶句 | | |
| 24 | 賦木形白鶴 | 巻二・147 | 七言絶句 | | |
| 25 | 晩秋二十詠 | 残菊 | 巻二・153 | 五言律詩 | |
| 26 | | 小松 | 巻二・154 | 五言律詩 | |
| 27 | | 黄葉 | 巻二・155 | 五言律詩 | |
| 28 | | 古石 | 巻二・156 | 五言律詩 | |
| 29 | | 疎竹 | 巻二・157 | 五言律詩 | |
| 30 | | 老苔 | 巻二・158 | 五言律詩 | |
| 31 | | 紅蘭 | 巻二・159 | 五言律詩 | |
| 32 | | 石泉 | 巻二・160 | 五言律詩 | |
| 33 | | 灘声 | 巻二・161 | 五言律詩 | |
| 34 | | 秋山 | 巻二・162 | 五言律詩 | |
| 35 | | 片雲 | 巻二・163 | 五言律詩 | |
| 36 | | 薄霧 | 巻二・164 | 五言律詩 | |
| 37 | | 孤雁 | 巻二・165 | 五言律詩 | |
| 38 | | 山寺 | 巻二・166 | 五言律詩 | |
| 39 | | 釣船 | 巻二・167 | 五言律詩 | |
| 40 | | 樵夫 | 巻二・168 | 五言律詩 | |

| | 詩題 | | 卷数・詩番 | 詩体 | 創作時期 | 言志の有無 |
|----|---------------------|--------|--------|------|--|-------|
| 41 | 夏 日 四 絶 | 柴扉 | 卷二・169 | 五言律詩 | 讃州時代 (仁 和 二 十 一 一 寛 平 二 年) (四 十 二 歳 一 四 十 六 歳) | |
| 42 | | 晴砂 | 卷二・170 | 五言律詩 | | |
| 43 | | 水鷗 | 卷二・171 | 五言律詩 | | |
| 44 | | 晚嵐 | 卷二・172 | 五言律詩 | | |
| 45 | | 蟬 聞 | 卷二・180 | 七言絶句 | | ○ |
| 46 | 竹 新 | 卷二・181 | 七言絶句 | ○ | | |
| 47 | 庭 沙 | 卷二・182 | 七言絶句 | ○ | | |
| 48 | 新月二十韻 | | 卷三・193 | 五言排律 | | ○ |
| 49 | 秋天月 | | 卷三・195 | 七言絶句 | | |
| 50 | 同諸小兒、旅館庚申夜、賦靜室寒燈明之詩 | | 卷三・211 | 七言律詩 | | ○ |
| 51 | 思家竹 | | 卷三・226 | 七言律詩 | | ○ |
| 52 | 觀瀑布水 | | 卷三・233 | 七言律詩 | | |
| 53 | 舟行五事 (一) | | 卷三・236 | 七言律詩 | | ○ |
| 54 | 殘菊下自詠 | | 卷三・238 | 七言律詩 | | ○ |
| 55 | 賦得春之徳風 | | 卷三・242 | 五言律詩 | | |
| 56 | 首夏聞鶯 | | 卷四・252 | 七言律詩 | | ○ |
| 57 | 新蟬 | | 卷四・253 | 七言絶句 | | ○ |
| 58 | 法花寺白牡丹 | | 卷四・257 | 五言律詩 | | ○ |
| 59 | 客舍書籍 | | 卷四・259 | 七言律詩 | | ○ |
| 60 | 聞早雁寄文進士 | | 卷四・265 | 七言律詩 | ○ | |
| 61 | 寄白菊四十韻 | | 卷四・269 | 五言排律 | ○ | |
| 62 | 秋雨 | | 卷四・270 | 五言律詩 | ○ | |
| 63 | 路辺殘菊 | | 卷四・271 | 七言絶句 | ○ | |
| 64 | 客居对雪 | | 卷四・276 | 七言律詩 | ○ | |
| 65 | 調藤司馬詠序前桜花之作 | | 卷四・286 | 七言絶句 | ○ | |
| 66 | 垂水花 | | 卷四・287 | 七言律詩 | ○ | |
| 67 | 官舍前播菊苗 | | 卷四・288 | 七言律詩 | | |
| 68 | 端午日賦艾人 | | 卷四・293 | 七言律詩 | ○ | |
| 69 | 喜雨 | | 卷四・295 | 七言絶句 | ○ | |
| 70 | 一葉落 | | 卷四・297 | 五言律詩 | ○ | |
| 71 | 路次見芭蕉 | | 卷四・300 | 七言絶句 | ○ | |
| 72 | 白毛嘆 | | 卷四・301 | 七言排律 | ○ | |
| 73 | 同諸小郎、客中九日、对菊書懷 | | 卷四・303 | 七言絶句 | ○ | |
| 74 | 早霜 | | 卷四・304 | 七言律詩 | ○ | |
| 75 | 对殘菊詠所懷 | | 卷四・305 | 七言律詩 | ○ | |
| 76 | 冬 夜 九 詠 | 山寺鐘 | 卷四・310 | 七言絶句 | ○ | |
| 77 | | 老松風 | 卷四・312 | 七言絶句 | | ○ |
| 78 | | 暁月 | | | | |
| 79 | | 野村火 | 卷四・314 | 七言絶句 | ○ | |
| 80 | | 水声 | 卷四・315 | 七言絶句 | ○ | |
| 81 | | 殘燈 | 卷四・316 | 七言絶句 | ○ | |
| 82 | 九日侍宴、同賦仙潭菊。各分一字、応製 | | 卷四・328 | 七言律詩 | | |
| 83 | 感白菊花 | | 卷四・331 | 七言律詩 | ○ | |
| 84 | 霜菊詩 | | 卷四・332 | 五言排律 | ○ | |

45 詠物と言志——菅原道真を中心として

| | 詩題 | 巻数・詩番 | 詩体 | 創作時期 | 言志の有無 |
|-----|--|--------|--------|---------------------------------|-------|
| 85 | 十月廿一日、禁中初雪、応製 | 巻五・339 | 七言律詩 | 宰相時代 (寛平二—九年) (四十六歳—五十三歳) | |
| 86 | 上巳日、対雨翫花、応製 | 巻五・340 | 七言律詩 | | |
| 87 | 賦春夜桜花、応製 | 巻五・344 | 七言律詩 | | |
| 88 | 雨晴対月、韻用流字、応製 | 巻五・354 | 七言排律 | | |
| 89 | 曉月、応製 | 巻五・355 | 七言絶句 | | |
| 90 | 惜残菊、各分一字、応製 | 巻五・356 | 七言律詩 | | ○ |
| 91 | 霜夜対月 | 巻五・361 | 七言律詩 | | ○ |
| 92 | 重陽夜、感寒蛩、応製 | 巻五・371 | 七言絶句 | | |
| 93 | 翫梅花、応製 | 巻五・376 | 七言絶句 | | |
| 94 | 賦雨夜紗燈、応製 | 巻五・380 | 七言律詩 | | |
| 95 | 暮秋、賦秋尽翫菊、応令 | 巻五・381 | 五言絶句 | | ○ |
| 96 | 春、惜桜花、応製一首 | 巻五・384 | 七言律詩 | | ○ |
| 97 | 月夜翫桜花、各分一字、応令一首 | 巻五・385 | 七言絶句 | | |
| 98 | 廬山異花詩 | 巻五・386 | 七言律詩 | | |
| 99 | (寛平七年暮春、予侍東宮、有令、做大唐一日百首、以一時、応十事題目。七言絶句、十首。) | 落花 | 巻五・391 | 七言絶句 | ○ |
| 100 | | 夜雨 | 巻五・392 | 七言絶句 | ○ |
| 101 | | 柳絮 | 巻五・393 | 七言絶句 | ○ |
| 102 | | 紫藤 | 巻五・394 | 七言絶句 | ○ |
| 103 | | 青苔 | 巻五・395 | 七言絶句 | ○ |
| 104 | | 鶯 | 巻五・396 | 七言絶句 | ○ |
| 105 | | 燕 | 巻五・397 | 七言絶句 | ○ |
| 106 | | 黄 | 巻五・398 | 七言絶句 | ○ |
| 107 | | 雀兒 | 巻五・399 | 七言絶句 | ○ |
| 108 | | 燈 | 巻五・400 | 七言絶句 | ○ |
| 109 | (寛平七年、東宮寓直之次、有令、取當時廿物、自西二刻、及戌二刻、廿篇僅成。今断失三首。五律詠物、一十七首。) | 風中琴 | 巻五・401 | 五言律詩 | ○ |
| 110 | | 竹 | 巻五・402 | 五言律詩 | ○ |
| 111 | | 薔薇 | 巻五・403 | 五言律詩 | |
| 112 | | 松 | 巻五・404 | 五言律詩 | ○ |
| 113 | | 酒 | 巻五・405 | 五言律詩 | ○ |
| 114 | | 牡丹 | 巻五・406 | 五言律詩 | |
| 115 | | 古石 | 巻五・407 | 五言律詩 | ○ |
| 116 | | 扇 | 巻五・408 | 五言律詩 | |
| 117 | | 屏風 | 巻五・409 | 五言律詩 | |
| 118 | | 錢 | 巻五・410 | 五言律詩 | |
| 119 | | 弓 | 巻五・411 | 五言律詩 | |
| 120 | | 石硯 | 巻五・412 | 五言律詩 | ○ |
| 121 | | 筆 | 巻五・413 | 五言律詩 | ○ |
| 122 | | 囲碁 | 巻五・414 | 五言律詩 | |
| 123 | | 鼓 | 巻五・415 | 五言律詩 | ○ |
| 124 | | 蜘蛛 | 巻五・416 | 五言律詩 | |
| 125 | | 壁魚 | 巻五・417 | 五言律詩 | ○ |
| 126 | 感殿前薔薇、一絶。 | 巻五・418 | 七言絶句 | | |
| 127 | 早春侍宴、同賦殿前梅花、応製 | 巻六・440 | 七言律詩 | | ○ |
| 128 | 八月十五夜、同賦秋月如珪、応製 | 巻六・441 | 七言絶句 | | |

| | 詩題 | 卷数・詩番 | 詩体 | 創作時期 | 言志の有無 |
|-----|-------------------------|--------|------|----------------------------------|-------|
| 129 | 重陽侍宴、同賦菊有五美、各分一字、応製 | 卷六・448 | 七言律詩 | 丞相時代 (昌泰元年一三年) (五十四歳一五十六歳) | |
| 130 | 九月後朝、侍宴朱雀院、同賦秋思入寒松、応太皇製 | 卷六・449 | 七言排律 | | ○ |
| 131 | 対残菊待寒月 | 卷六・451 | 七言絶句 | | |
| 132 | 賦殿前梅花、応太皇製 | 卷六・452 | 七言絶句 | | ○ |
| 133 | 早春内宴、侍清涼殿同賦鷲出谷、応製 | 卷六・453 | 七言律詩 | | |
| 134 | 九月侍宴、同賦菊散一叢金、応製 | 卷六・460 | 七言絶句 | | ○ |
| 135 | 九月尽日、題殘菊、応太皇製 | 卷六・461 | 七言律詩 | | ○ |
| 136 | 和紀処土題新泉之二絶 (一) | 470 | 七言絶句 | 太宰謫居 (延喜元年一三年) (五十七歳一五十九歳) | |
| 137 | 和紀処土題新泉之二絶 (二) | 471 | 七言絶句 | | |
| 138 | 九日侍宴、同賦寒露凝、応制。一首 | 472 | 七言律詩 | | |
| 139 | 冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂 | 475 | 七言律詩 | | ○ |
| 140 | 聞旅雁 | 480 | 七言絶句 | | ○ |
| 141 | 東山小雪 | 487 | 五言律詩 | | ○ |
| 142 | 白微霰 | 489 | 七言律詩 | | ○ |
| 143 | 雪夜思家竹 | 490 | 五言古詩 | | ○ |
| 144 | 聽寺鐘 | 491 | 七言絶句 | | ○ |
| 145 | 梅花 | 495 | 七言絶句 | | ○ |
| 146 | 種菊 | 497 | 七言律詩 | | ○ |
| 147 | 夜雨 | 500 | 五言古詩 | | ○ |
| 148 | 題竹床子 | 501 | 七言律詩 | | ○ |
| 149 | 秋晚題白菊 | 505 | 七言絶句 | | ○ |
| 150 | 風雨 | 507 | 五言律詩 | | ○ |
| 151 | 燈滅二絶 (一) | 508 | 七言絶句 | | ○ |
| 152 | 燈滅二絶 (二) | 509 | 七言絶句 | | ○ |
| 153 | 問秋月 | 510 | 七言絶句 | | ○ |
| 154 | 代月答 | 511 | 七言絶句 | | ○ |
| 155 | 謫居春雪 | 514 | 七言絶句 | | ○ |